台湾茶の歴史を訪ねる　第六回

# (6)　包種茶外伝　沖縄さんぴん茶と台湾

須賀　努（コラムニスト / 茶旅人）

これまで２回にわたり、包種茶の歴史を書いてきた。当初は簡単だろうと思っていたその歴史にどっぷりと嵌り、その広がりに驚き、ついには抜け出せない状況にまで陥ってしまった。前回までの調査で判明しなかった大きな課題として、沖縄に輸出された包種茶の行方があった。とうとう沖縄まで行って、その歴史を追いかけていくことになる。茶旅というのは常に面白く、そして恐ろしい。

## さんぴん茶とは何か

５年前に沖縄に行った時、『沖縄ではどんなお茶が飲まれているのか？』と聞いて回るとほぼ一様に『さんぴん茶さ』という答えが返って来た。では『さんぴん茶とは何か？』と聞くと『ジャスミン茶さ』というのだが、『なぜさんぴん茶と呼ぶのか？』と聞いても、答えてくれる人はいなかった。

ただ中国語を勉強したことがある人なら、ピンと来るかもしれない。中国ではジャスミン茶のことを『香片』と書き、『シアンピエン』と発音する。広東語なら『ヒョンピン』となる。そして福建省福州出身者に問い合わせると、さんぴんにほぼ近い発音であることが分かった。

実はジャスミン茶というのは福州の名産であり、そこから北京などの北方、広東・香港などの南方に送られていったと聞いている。すると琉球王朝と清朝の関係に思いが至る。琉球は当時清朝に朝貢の形態をとっており、その窓口は福州であり、福州琉球館が存在していた。当然人や物資も往来もあったと考えられ、福州の茶が琉球に運ばれたことは容易に想像できる。

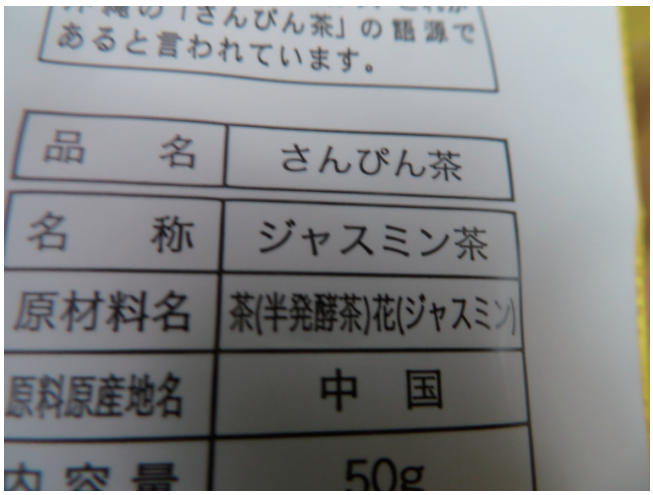
因みに沖縄でさんぴん茶が庶民層に普及したのは1901年に尚家の貿易会社、丸一洋行が福州に製茶工場を設置し、さんぴん茶を輸入した頃からであるらしい。福州では1910年代に福州琉球館の建物で、沖縄の人が製茶をしていたとの話も聞いているが、その当時の茶が発酵茶だったのか、緑茶だったのかを知る手掛かりはない。ただ台湾で売れ残った烏龍茶を福州に運んで包種花茶を作ったとの記録から見ると、沖縄向けの茶もこの類ではなかったかと想像されている。

福州　復元された琉球館

尚現代中国ではジャスミン茶の言い方は２つある。茉莉花茶と香片茶である。この２つはどう違うのかを普段は真剣に考えることもなく、単に北方では茉莉花、南方が香片ぐらいに思っていた。念のために以前福州へ行き、大手茶問屋を訪ねて聞いてみたことがあったが、何と『等級の違い』であるという。具体的には特級から４級までが茉莉花、5-7級が香片だと説明された。つまり香片の方がグレードの低い、低級茶だった。

それは一体何を意味するのか。全くの素人考えだが、清朝時代、皇帝のもとへは高級茶が運ばれ、香片が送られるのは、朝貢相手、または属国扱い

福州　茉莉花と香片茶の違いを尋ねる




那覇　公設市場付近で降られていたさんぴん茶

の場所ではなかったのか。現に香港、台湾、沖縄では香片という呼び方をしているので、往時の勢力関係が読み取れるような気がして興味深い。

ところでジャスミン茶とは何か。筆者はこの定義について長年、大きな勘違いをしていることに今回気が付いた。ジャスミン茶とは緑茶にジャスミンの花香を着香して作るお茶だと思い込んでいたが、福州でも高級茶には緑茶ではなく、白茶や発酵茶が使われていたと聞いて驚いた。ジャスミン茶の茶は緑茶とは限らないのである。

## 沖縄さんぴん茶とは

ふと、以前沖縄で飲んださんぴん茶を思い出した。確かにジャスミンの香りはしたが、何となく違和感があったのだ。もしこれが緑茶ではなく、軽く発酵した茶を使ったのであれば、納得がいくような気がした。そこで沖縄を再訪し、その辺を確かめてみることになった。

観光客で賑わう国際通り、公設市場付近に並ぶ土産物屋には、さんぴん茶が置かれていた。中には『50g、98 円』などと書かれた破格に安い茶も売られている。そのラベルとみてみると、『中国産 茶（半発酵茶）花（ジャスミン）』とはっきり書かれているではないか。さんぴん茶は基本的に緑茶ではなく発酵茶が使われていることが確認できた。

沖縄さんぴん茶の歴史を調べようと、琉球大学の図書館へ向かった。だが、沖縄関係の書物が大量にあるこの図書館でさえもさんぴん茶の歴史を語るものを見つけることは出来なかった。唯一見つけた『しまくとぅばの課外授業』（石崎博志著）の中に『（さんぴん茶は）本来は台湾で生産される包種茶に茉莉・秀英などで着香した茶を言うが、1974 年から緑茶に着香したものをいう』という辞典からの引用があった。これは実に興味深い内容だ。

数人の茶業関係者に『台湾の包種茶が昔沖縄に輸入されていたようですが』と言うと即座に『ああ、さんぴん茶のことだね』と言われたこともあり、少なくとも、台湾から輸出された包種茶が、沖縄ではさんぴん茶と呼ばれていたことが推測で出来た。昔のさんぴん茶を求めて、那覇の街を探し始めた。桜坂にある老舗、比嘉茶舗は古い佇まいを残していたが、初代が 2 年前に引退し、最近は店が開くことも稀だと聞いた。

もう一軒、国際通りから少し入った所に創業 60 年の茶仙という店があった。店主の松本晴文さんに伺うと、ピンクの細長い包みを指して、これが昔からのさんぴん茶の包装だという。ただ中身は随分前に台湾製から中国製に代わっており、今で

那覇　昔のピンクの包装と現在のさんぴん茶

那覇　さんぴん茶と清明茶を語る茶仙の松本氏

は常連さんが買いに来るだけだという。その説明を見てみて驚いた。『名称：包種茶、品名：さんぴん茶、原材料名：ジャスミン茶、原産国：中国』となっているではないか。

さんぴん茶とは何か？現時点で理解したことは『台湾包種茶（または包種花茶）、中国ジャスミン発酵茶、中国ジャスミン緑茶』の３つが、時代ごとにさんぴん茶と呼ばれたのではないだろうかということだ。実際にはこの他、更に発酵度が高く、香りの強い清明茶（シ―ミ―茶）も台湾、中国双方から輸入されていたようであり、かなり複雑な様相を呈している。

## さんぴん茶の歴史

あくまで概略として、さんぴん茶の歴史は以下のような感じかと推察する。琉球時代、福州よりジャスミン発酵茶（緑茶の可能性もある）がもたらされていた。1930 年代頃から 1960 年代まで、台湾包種茶または包種花茶が台湾より大量に輸入される（中国からの輸入も続いていたが台湾経由だったらしい）。1970 年以降は中国からの輸入が多くなり、緑茶を使ったものが増える（台湾産の輸入も細々と続いている）。

前回まで述べてきたように、包種茶は 1930 年代から光復までの間、満州、沖縄、タイなどへの輸出が多く見られる。これは当然戦争との関係を抜きにしては語れない。特に 1937 年の日中戦争勃発以降、中国大陸から沖縄への貿易にも相当に支障があったであろう。一方当時日本の領土であった台湾からの輸入に問題はなく、沖縄の人々のテーストに合うお茶が供給された、それが包種茶だった。このお茶であれば発酵茶であり、包種花茶などはジャスミンの花が使われたと思われる。

光復後、沖縄は米軍占領下となり、台湾には国民党がやって来た。ただ両方ともに西側陣営であり、共産中国よりも貿易は自由であったと考えられ、戦時中同様、包種茶の交易は続いていた。台湾側で聞いたところ、『昔は三芝あたりに沖縄専門茶問屋が数軒あったが、今はすべて潰れてしまった』というが、この時代は、沖縄だけで儲けが出ていたことを示している。

実は沖縄の後に台湾へ行き、三芝の茶廠が一軒だけ残っているという情報を得たが、そこへ行こうにも、バスなど交通機関の無い場所で断念せざるを得なかった。数十年前は淡水の北、基隆の西には、茶畑が沢山あり、包種茶なども作られていたというが、ここから台湾へ輸出されたのだろうか。また今は緑茶で知名度を上げている三峡で

も、1950年代に大量の包種茶を作り、輸出したという証言も得ている。

今回那覇で、台北駐日経済文化代表處那覇分處の蘇啓誠處長のご厚意により、茶業を営んでいる田中義夫さんとお会いした。田中さんは現在89歳。元台湾人であり、228事件の折に宮古島へ渡った人だった。宮古で農業をやり、那覇ではコックをやっていたというが、その後商売に転じ、1956年に茶の扱いを始めた。『そう、あの頃は全部台湾から茶を持ってきたよ』といい、そのお茶は発酵茶にジャスミンの花を交ぜた物だったと語る。当時は台湾側に数軒の沖縄専門茶業者がおり、大稲埕の加工工場でその作業を実際に見たこともあるという。

田中義夫氏と台北駐日経済文化代表處那覇分處蘇啓誠處長

コックの経験もある田中さんは、なぜ沖縄で発酵茶を使ったさんぴん茶が好まれたかについて『豚の油（ラード）を好んで使っていたため、その脂っこいものを落とすのに、発酵した茶が適していたから』と言い、『その後、緑茶ベースの中国さんぴん茶に変わっていったのは、沖縄人の食生活がサラダ油などに代わったからだろう』と極めて興味深い見解を披露してくれた。

だが田中さんは1960年代には既に茶業の未来を悲観して、扱う商品を変えていったともいう。『伊藤園のパック茶「寿」を見た時、問屋は儲からなくなると思った』というのだ。調べてみると伊藤園の前身、フロンティア製茶が1966年にパック茶を発売、72年には真空処理・二重包装を実現、それからは誰でも簡単に茶葉を詰めて、スーパーなどで売る時代が到来する。

さんぴん茶もすぐにパックに入れられたのだろうか？茶仙の松本晴文さんに伺うと、『パックに茶葉を入れると、さんぴん茶の味が変わった、などと言われ、なかなか普及しなかった』と先代から聞いている。このお店で今でもピンクの紙を使用して細長く包装されたさんぴん茶が日用品をとして売られているのはその名残だろうか。

1960年代、台湾からの茶の輸入は減少していく。その理由は、台湾茶の価格上昇などだけではなく、1950年代に沖縄で農業振興策がとられ、台湾茶の輸入代替として、地元で茶を作る動きが出たからだという。今回名護にある金川製茶を訪ね、比嘉さん親子に話を聞いてみた。金川製茶の創業はまさに1950年代、1961年には最初の茶工場を作り、最初は釜炒り茶を作っていたという。その茶葉は、『台湾から輸入した実生在来種を使った』と聞き、ここでも台湾との関連が出てきた。

そして60年代後半に沖縄の煎茶生産が始まると、1972年には川崎製の蒸し製緑茶生産ラインを導入し、その後は煎茶を静岡に送り続けたという。

名護　金川製茶の比嘉親子と

実はこの流れは次回紹介しようと考えている、台湾緑茶における煎茶生産と全く期を一にしており、面白い。尚数年前から息子の竜一さんが紅茶生産を開始、試行錯誤の末、昨年は国産紅茶グランプリで金賞を受賞するまでになっている。

## 清明茶について

実は那覇ではもう一つ『清明（シーミー）茶』というのが売られていた。前述の茶仙にお邪魔した時、『懐かしの清明茶あります』という張り紙を見て、興味本位で見せてもらった。このお茶は形状が球型で、強いジャスミンの香りがした。確か中国でよく売られているものだと思ったが、何と『台湾産だ』というではないか。

この清明茶、戦前はさんぴん茶より好まれていたという人もいる。さんぴん茶より高発酵の茶葉を使っており、花香も強いという印象を受けた。この茶は恐らく、琉球時代の交易品の中にあったのではと推測する。当時の中国茶全体を表す名称だとも言われている。

清明茶とさんぴん茶

中国で龍珠茶と呼んでいたお茶があったような気がする。調べていくと、台湾にも龍珠茶と呼ばれている茶があったので、早々に産地に問い合わせてみた。ところが『台湾の龍珠茶は阿里山珠露茶の夏茶ブランドであり、中国とは別物』という意外な答えでまた驚く。

その後南投県の一大茶産地松柏嶺の茶農家を訪ね、清明茶に類するものを作っていないかと聞いてみるも『現在のコストから考えて、沖縄に輸出するような茶を台湾で作っているとは考えにくい。もし台湾から輸入していると言っているなら、中国かベトナムあたりから台湾経由で輸入しているのだろう』との見解を示される。確かに沖縄でもほとんど飲まれていない茶を、少量生産するのはコストの高いところでは難しいだろうから、安価な龍珠茶の一部が回ってきているのかもしれない。因みにこの地域では今でも比較的安価な包種茶が作られているというから、最後まで驚きどうしだった。

今回で包種茶の報告を終わりにする。それにしても、包種茶は坪林だけで作られている訳ではなく、ましてや輸出の主力商品であり、沖縄にも大量に輸出されていたなど、本当に知らないことだらけであった。茶の歴史の凄さを思い知る、この包種茶というテーマに感謝したい。